

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380840

研究課題名(和文) 愛着スタイル尺度は無意識の情報処理過程を捉えているか

研究課題名(英文) Does adult attachment style scale capture unconscious information processing process?

研究代表者

戸田 弘二 (TODA, Koji)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：60207579

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：愛着の内的作業モデルを測定するために質問紙による愛着スタイル尺度を用いることが多い。しかし、質問紙による測定は内的作業モデルの無意識の情報処理を捉えていないのではないかという問題点が指摘されている。この指摘に対して、本研究では、質問紙による愛着スタイル尺度の妥当性を、(1)潜在的指標との関連、(2)愛着スタイル尺度間の比較、(3)アダルト・アタッチメント・インタビュー(DMM-AAI)との関連の3つの観点から検討することを目的とした。その結果、3つの観点とも概ね愛着理論に整合する結果が得られ、質問紙による愛着スタイル尺度の妥当性が示された。

研究成果の概要(英文)：Adult attachment style scale has been used in order to assess one's internal working model in many studies. However, it is sometimes suspected whether unconscious information processing in one's internal working model is reflected in pencil and paper questionnaires or not. In this study, we tried to validate the adult attachment style scale in following three ways: Examine the relationship between adult attachment style scale and 1)implicit measures, 2)other several adult attachment style scales, 3)adult attachment interview(DMM-AAI). Results shows that the patterns of relationship between the scale and other variables is consistent with the attachment theory and the validity of the scale is confirmed.

研究分野：社会心理学

キーワード：アタッチメント 内的作業モデル 愛着スタイル尺度 潜在的指標 アダルト・アタッチメント・インタビュー 妥当性

1 . 研究開始当初の背景

1980 年代後半に成人の愛着スタイルを測定するための二つの方法が相次いで発表された。Main, et al., (1985) による成人愛着面接法 (Adult Attachment Interview: AAI) と Hazan & Shaver (1987) による愛着スタイル質問紙 (Attachment Style Questionnaires: ASQ) である。両者はほぼ同時期に発表されながら、交流することもなく現在に至るまで独立に発展している。

ASQ は単一項目からなる強制選択形式の質問紙であったため信頼性に問題があり、その後、複数の評定項目からなる多次元尺度が作成されるようになった。日本でも筆者ら (詫摩・戸田, 1988; 戸田, 1988) が ASQ を参考にいち早く内的作業モデル尺度 (Internal Working Model Scale: IWMS) を作成し発表した。その後、IWMS は日本での主要な愛着スタイル尺度として多くの研究に用いられてきた。諸外国でも同様に、多くの研究者が評定法形式の質問紙尺度を作成した。やがて 1990 年代後半になると Brennan, Clark & Shaver (1998) がそれまでに作成された 14 の質問紙尺度を用いて「見捨てられ不安」と「親密性の回避」という 2 因子を抽出し、ECR (Experiences in Close Relationships inventory) という多次元尺度を発表した。この尺度は Bartholomew & Horowitz (1991) による愛着の 2 次元 4 カテゴリーモデルにも対応したため、その後、世界におけるスタンダードな質問紙尺度として用いられるようになった。日本でも中尾・加藤 (2004) が ECR の愛着対象 (恋人) を一般他者に置き換えて作成した ECR-GO (Experiences in Close Relationships inventory generalized-other-version) を発表し、現在は ECR-GO も日本での主要な質問紙尺度として定着してきている。

ところで、AAI は子ども時代の愛着にまつわる様々な経験を問うことで愛着システムを活性化しよう工夫されており、これにより被面接者自身も意識化していない愛着に関する情報処理過程の個人的特徴を直接測定することができるという点において、現在最も妥当性の高い方法とされている。しかし、AAI は開発者の Main のもとでトレーニングを受けて正式コーダーの資格を得なければならない、面接内容を逐語録に書き起こし一人の被験者に対して 10 数時間をかけて分析・分類せざるを得ない等、極めてコストの高い方法でもある。一方、自記入式の質問紙尺度は AAI に比べると極めて簡便な方法であるが、AAI のように愛着システムを活性化したり、無意識的な情報処理過程を扱っていないという妥当性に関わる批判が主に AAI を用いている研究者から出されている。この批判に対しては、今のところ諸外国では情報処理的アプローチを援用した社会的認知研究からの反論がなされているが、日本ではまだ反論のための十分な研究は蓄積されていない。

い。そこで本研究では「2. 研究の目的」に示す 3 つの観点から質問紙法による愛着スタイル尺度による測定結果が内的作業モデルの無意識の情報処理過程を反映していることを検証することで、質問紙による愛着スタイル尺度の妥当性を検討することとした。

2 . 研究の目的

本研究は成人の愛着スタイルを測定するための質問紙尺度の妥当性を、(1) 潜在的指標との関連、(2) 愛着スタイル尺度間の比較、(3) アダルト・アタッチメント・インタビュー (DMM-AAI) との関連の 3 つの観点から検討することを目的とした。

3 . 研究の方法

上記(1)の実験に関しては、以下の 4 つの研究を行った。戸田・芳賀 (2013) では計 96 名の大学生を対象に闕下・闕上プライミングを用いた 4 つの語彙判断課題を行い、これらと IWMS および ECR-GO との関連を検討した。

戸田・加納 (2013) では 42 名の大学生を対象に潜在的な不安を測定する不安 IAT (Implicit Association Test) と潜在的な自尊感情を測定する自尊感情 IAT を試行し、これらと IWMS および ECR-GO との関連を検討した。戸田 (2013) では 32 名の大学生を対象に乳児の笑顔と泣き顔に対する潜在的な快・不快を測定する GNAT (Go/No-go Association Task) を試行し、これらと内的作業モデル尺度との関連を検討した。戸田 (2014) では 36 名の大学生に潜在的自尊感情を測定する Single Category IAT を試行し、これと内的作業モデル尺度との関連を検討した。

上記(2)の調査に関しては、以下の 2 つの研究を行った。古村・村上・戸田 (2016) では 3 つの研究を行った。研究 1 では Web 調査による成人男女 982 名を対象に ECR-RS (Experiences in Close Relationships - Relationship Structure) と抑うつ尺度、再認傾向尺度、自尊感情尺度を実施し、日本語版 ECR-RS の尺度構成を行った。研究 2 では大学生 563 名を対象に複数の愛着スタイル尺度 (ECR-RS, IWMS, RQ, ECR-GO) を実施し、ECR-RS と他の愛着スタイル尺度間の関連を検討した。研究 3 では 342 名の大学生を対象に約 1 ヶ月の期間を置いて ECR-RS を 2 回実施し、ECR-RS の再検査信頼性を確認した。古村・村上・戸田 (2016) では 155 名の大学生を対象に ECR-RS の一般他者版 (ECR-RS-GO) と BIS・BAS 尺度を実施し、日本語版 ECR-RS-GO の尺度構成を行った。

上記(3)の面接に関しては、共同研究者の三上が Crittenden 博士の研修会に参加し、2015 年に DMM-AAI (Dynamic Maturational Model of attachment and adaptation-AAI) コーダーの資格を取得した。そして、戸田・古村・村上・三上・北川 (2015) で 10 名の大学生を対象に DMM-AAI を試行し、ECR-RS と

の関連を検討した。

4. 研究成果

(1) 潜在的指標と愛着スタイル尺度との関連：戸田・芳賀(2013)では愛着に関する脅威刺激をプライム刺激として提示することで実験参加者の愛着システムを活性化し、愛着スタイル尺度で測定した内的作業モデルの情報処理機能について検討した。第1研究と第2研究では“別れ”などの文字によるプライム刺激を閾下提示し、第3研究では乳幼児の泣き顔などの写真をプライム刺激として閾下提示した。一方、第4研究では愛着対象との分離を含む動画刺激を閾上で視聴させることで愛着システムを活性化し、愛着対象の名前などに対する反応時間の違いを検討した。その結果、第2研究と第3研究において有意ではないが IWMS のアンビバレント得点が高いほど愛着対象の名前に対する反応時間が早いというアンビバレント型の過活性化方略を示す結果が、第4研究において IWMS と ECR-GO の回避得点が高いほど愛着対象の名前に対する反応時間が遅いという回避型の不活性化方略を示す結果が得られた。しかし、いずれの重回帰分析においても決定係数は有意ではなかったことから、プライミングよりも信頼性の高い潜在指標を用いて結果の再現性を検討する必要が報告された。

そこで戸田・加納(2013)では、より信頼性が高い(Bosson et al., 2000)とされる潜在連合テスト(IAT: Implicit Association Test)を用いて愛着スタイル尺度で測定された内的作業モデルの情報処理機能を検討した。仮説は以下の通りである。仮説1: アンビバレント型の過活性化方略のために、アンビバレント得点は潜在的指標よりも顕在的指標とより強く関連するだろう。仮説2: 回避型の不活性化方略のために、回避得点は顕在的指標よりも潜在的指標とより強く関連するだろう。仮説3: 安定型は防衛的情報処理をとる必要がないことから、潜在指標と顕在指標に大きな差はないだろう。その結果、IWMS で測定したアンビバレント得点は潜在不安、顕在不安とも有意な正の関連を示していたが、顕在不安でより強く関連していた。回避得点は潜在不安とは正の有意傾向を示していたが、顕在不安とは関連を示さなかった。安定得点は潜在不安とは有意ではないが負の値を示したが、顕在不安とは関連を示さなかった。一方、自尊感情では、アンビバレント得点が顕在自尊感情と有意な負の関連を示した以外には有意な値は認められなかった。さらに、有意ではなかったが潜在自尊感情と安定型に負の、回避型に正の係数が認められた。以上より、不安に関しては、ほぼ仮説通りの結果が得られたが、自尊感情については安定得点と回避得点で理論から予測される結果とは逆の結果が得られた。これは対象概念を対にして測定する IAT の特徴に

よるものと考えられた。すなわち、IAT では「自分-快い」の連合の強さは同時に「他人-不快な」の連合の強さをも表しており、安定型と回避型の結果は他者に対する潜在的な不快感を反映していた可能性が考えられた。よって対象概念を別々に測定できる潜在指標を用いて潜在的自尊感情の結果を再検討する必要がある。

続いて戸田(2013)では GNAT(Go/No-go Association Task)を用いて、愛着システムを活性化するであろうと考えられる乳幼児の笑顔と泣き顔に対する潜在的態度と顕在的態度を測定し、これと愛着スタイルとの関連を検討することで、愛着スタイル尺度が内的作業モデルの潜在的・顕在的情報処理機能を捉えているかどうかを検討した。その結果、笑顔に対しては、安定得点は潜在的指標と有意な正の関連を、顕在的な不快得点とは有意な負の関連を示していた。また、アンビバレント得点は潜在指標と有意な正の関連を示したものの、顕在指標とは快得点、不快得点とも有意な関連は見られなかった。回避得点は潜在指標、顕在指標いずれとも有意な関連は示さなかった。一方、泣き顔に対しては、アンビバレント得点が顕在的な不快得点と有意な正の関連を示したのみであった。安定得点が高いほど笑顔に対して潜在的に快感情を示し、顕在的にも不快感情を示さなかったことは安定型の情報処理方略に一致する結果である。また、アンビバレント得点が高いほど笑顔に対して潜在的には快感情を持ちながら、それを顕在的には表現しないこと、泣き顔に対して潜在的には快-不快を持たないのに、顕在的には不快感情を強く示していた。快感情を抑制し不快な感情を強く表現するという特徴はアンビバレント型の過活性化方略に通じるものがある。

戸田(2014)では戸田・加納(2013)で指摘された対象概念を別々に測定するために、対象概念を単独で測定できる Single Category IAT を用いて、愛着スタイル尺度で測定した内的作業モデルと顕在的、潜在的自尊感情との関連を検討した。その結果、有意ではないがアンビバレント得点と回避得点は潜在的自尊感情と負の関連を示し、理論と整合する結果であった。しかし、安定得点は Single Category IAT を用いてもやはり負の関連を示していた。

以上、各種の潜在的指標と愛着スタイル尺度の関連は一部、理論からは説明できない結果もあったが概ね愛着理論と整合する結果であった。今後は、サンプル数を増やして再現性を確認するとともに、測定方法をさらに工夫することで結果の安定性を保証する必要がある。

(2) 愛着スタイル尺度間の比較：従来の愛着スタイル尺度(IWMS や ECR-GO 等)には2つの問題点があった。ひとつは項目数の多さである。ECR-GO は36項目、IWMS でも18項目と Web 調査や実験で複数の尺度を用いるに

は制約が多い。ふたつめは複数の対象への愛着スタイルの個人内比較ができないことである。このことは内的作業モデルの階層構造の検討を困難にしている。そこで、古村・村上・戸田(2016)では、研究1で Fraley, Heffernan, Vicary, & Brumbaugh(2011)が作成した Experience in Close Relationships Relationship-Structure(ECR-RS)の日本語版を作成し、抑うつ、自尊感情、重要他者への再認傾向との関連から妥当性の検証を行った。ECR-RSは回避6項目と不安3項目から構成されており、各項目を母親、父親、恋人、友人の4対象に対して回答することで、複数対象への愛着スタイルを少ない項目で測定することを可能にする尺度である。その結果、因子構造、内的一貫性、基準関連変数との関連、いずれも仮説通りの結果が得られた。研究2では ECR-RS を含む複数の愛着スタイル尺度 (ECR-GO, IWMS, RQ) 間の関連を検討した。その結果、ECR-RS の全体回避と IWMS の回避得点の相関が低い以外は各尺度の関連は整合していた。3 類型の回避型が 2 次元 4 類型モデルの拒絶型と恐れ型の 2 つを含むという指摘 (Bartholomew & Horowitz, 1991) もあり、3 次元モデルに基づいた尺度 (IWMS) と 2 次元 4 類型モデルに基づいた尺度 (ECR-GO, ECR-RS, RQ) の違いによるものかもしれない。研究3では約1ヶ月の期間において ECR-RS の再検査信頼性を検討した。その結果、いずれの下位尺度においても強い正の相関 ($r_s = .71 \sim .83$) を示していた。さらに、一時的な誤差を考慮した再検査信頼性の推定値である test-retest (Green, 2003) を求めたところ、母親と父親への回避と比べて恋人と友人への回避の変動性が高く、またいずれの対象も回避に比べて不安の変動性が高かった。この結果は Fraley et. al. (2011) の結果と整合していた。

続いて、古村・村上・戸田(2016)では ECR-RS の一般他者版である ECR-RS-GO 日本語版を作成し、その因子構造と BIS・BAS との相関を検討した。その結果、先行研究と同様の因子構造が確認され、因子負荷量も十分に高かった。また、BIS・BAS 尺度との相関では、回避は BAS と負の相関を、不安は BIS と正の相関を示しており、これも先行研究の結果と一致していた。

以上、愛着スタイル尺度間の比較では、回避において3次元モデルと2次元4類型モデルの差異が認められたが、他の面では各下位尺度はほぼ整合した結果が得られた。また、ECR-RS と ECR-RS-GO を作成したことにより、内的作業モデルの階層構造が検討できるようになったとともに、Web 調査や複数の尺度を用いた実験などにおいても制約を受けることなく愛着スタイルを変数として組み込むことができるようになった。今後は、ECR-RS と潜在的指標や成人愛着面接等、質問紙以外の測定方法との関連を検討する必要がある。

(3) アダルト・アタッチメント・インタビュー (DMM-AAI) との関連：研究分担者の三上が 2015 年度に DMM-AAI のコーダー資格を取得した。戸田・古村・村上・三上・北川(2015)では「アタッチメント・スタイルの新しい測定方法とその応用可能性 DMM-AAI と ECR-RS 日本語版」と題するシンポジウムを行った。このシンポジウムでは共同研究者の古村が「ECR-RS の邦訳と妥当性評価」と題して ECR-RS の紹介と日本語版作成に関する一連の過程について発表した。次いで、共同研究者の村上が「ECR-RS の応用可能性 各対象に対する IWM が精神的健康および養育行動に及ぼす影響」と題して、精神的健康や子育て行動に対して各対象への愛着スタイルが異なる関連を示すことを報告し、関係固有モデルを測定する ECR-RS の応用可能性について論じた。そして、研究分担者の三上が「DMM-AAI の特徴について：AAI との比較および日本での基礎研究」と題して、DMM-AAI の紹介をした後、10名の大学生を対象とした DMM-AAI と ECR-RS 日本語版との関連について報告した。10名はいずれも B タイプ (安定型) であったため、B タイプの下位分類と関連を検討した。その結果、B タイプの下位分類の中では A タイプ (回避型) に近い B1 と B2 は B4 に比べて ECR-RS の父親と母親への回避得点が高かった。一方、DMM-AAI の分類は友人への回避や各対象への不安との関連は見られなかった。これらの結果は、サンプル数が少なく、B タイプの下位分類間の比較という制限はあるものの、DMM-AAI が主に母親と父親との関係を質問していることから考えると理論と整合した結果であり、愛着の関係固有モデルを測定する ECR-RS の応用可能性を示したものといえる。

以上、3つの観点から質問紙法による愛着スタイル尺度の妥当性を検討した。いずれの場合においても概ね理論と整合する結果が得られており、愛着スタイル尺度の妥当性が検証されたといっていいただろう。しかし、潜在的指標との関連では、いずれの研究も効果量が低く、結果の再現性や安定性を確保するための方法上の工夫が必要である。また、DMM-AAI ではさらにサンプルを増やし B タイプ以外の分類も含めたさらなる検討が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

古村健太郎・村上達也・戸田弘二 (2016). アダルト・アタッチメント・スタイル尺度 (ECR-RS) 日本語版の妥当性評価 心理学研究, 87, 303-313. (査読有)

三上謙一 (2015). アタッチメント理論から考える現代の大学生像とその援助 アタッチメントと適応の力動 - 成熟モデル (DMM) からの考察 思春期青年期精神医学, 24, 168-178. (査読無)

三上謙一 (2014) 「新しい」アダルト・アタッチメント・インタビュー研修会に参加して「アタッチメントと適応の力動-成熟モデル(DMM)」とは何か 思春期青年期精神医学, 24, 168-178. (査読無)

戸田弘二・芳賀信太郎 (2013). 愛着システムの活性化と内的作業モデルの情報処理機能 北海道教育大学紀要(教育科学編), 64, 53-69. (査読無)

[学会発表](計10件)

古村健太郎・村上達也・戸田弘二 (2016) アタッチメント・スタイルの階層構造の検討 (1) ECR-RS-GO の作成 日本パーソナリティ心理学会第25回大会, 9月14日~15日, 関西大学(大阪府・吹田市)

戸田弘二・古村健太郎・村上達也・三上謙二・北川恵 (2015). アタッチメント・スタイルの新しい測定方法とその応用可能性 DMM-AAI と ECR-RS 日本語版 日本パーソナリティ心理学会第24回大会, 8月21日~22日, 北海道教育大学(北海道・札幌市)

Mikami, K. (2015) Applying the DMM to counselling in University: Using the DMM-AAI for Clinical Practice, 4th International Conference of the International Association for the Study of the Attachment(Miami)

戸田弘二 (2014). 内的作業モデルの情報処理機能について(3) Single Category IAT を用いて 日本パーソナリティ心理学会第23回大会, 10月4日~5日, 山梨大学(山梨県・甲府市)

古村健太郎・村上達也・戸田弘二 (2014). ECR-RS 日本語版の作成(1) 因子構造と信頼性の確認 日本心理学会第78回大会, 9月10日~12日, 同志社大学(京都府・京都市)

戸田弘二・古村健太郎・村上達也 (2014). ECR-RS 日本語版の作成(2) 対象間相関と基準関連妥当性の検討 日本心理学会第78回大会, 9月10日~12日, 同志社大学(京都府・京都市)

村上達也・戸田弘二・古村健太郎 (2014). ECR-RS 日本語版の作成(3) 複数のアタッチメント対象に対するアタッチメント・スタイルが抑うつに及ぼす影響 日本心理学会第78回大会, 9月10日~12日, 同志社大学(京都府・京都市)

三上謙一 (2014). 愛着理論から考える現代の大学生像とその援助: 愛着と適応の力動成熟モデル(DMM)からの考察 日本思春期青年期精神医学会大27回大会, 7月5日~6日, 北海道大学学術交流会館(北海道・札幌市)

戸田弘二 (2013). 内的作業モデルの情報処理機能について(2) GNAT (Go/No-go Association Task) を用いて 日本パーソナリティ心理学会第22回大会, 10月12日~13日, 江戸川大学(千葉県・流山市)

戸田弘二・加納絵里香 (2013). 内的作業モデルの情報処理機能について 潜在連合テスト(Implicit Association Test)を用いて 日本心理学会第77回大会, 9月19日~21日, 北海道医療大学・札幌コンベンションセンター(北海道・札幌市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

戸田弘二 (TODA Koji)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号: 60207579

(2) 研究分担者

三上謙一 (MIKAMI Kenichi)

北海道教育大学・保健管理センター・准教授

研究者番号: 90410399

(3) 研究協力者

古村健太郎 (KOMURA Kentaro)

弘前大学・人文社会科学部・講師

村上達也 (MURAKAMI Tatsuya)

高知工科大学・共通教育教室・講師